斉藤　典子
名古屋大学文学部文学研究科比較人文学　博士後期課程 2 年

伊豆半島の海女や漁師にとっての「引退」とは
－高齢者の生き甲斐と経験知の再活用をめぐってー

サラリーマンは定年を契機に現役を退くが、海女や漁師は「引退」とは、無縁の世界に生きているのであろうか?これは、私が伊豆半島に住む海女のテングサ労働の調査を続ける中で生まれてきた疑問である。多くの近隣地域が海女の高齢化に伴う後継者不足から、テングサ漁を終える中、下田市須崎地区は、70,80 代の海女が海に潜り、テングサ労働を続ける。また、配偶者とともにエビ網漁も行う。つまり、夫婦ともに身体が動けば、70 歳を超えても現役の漁師や海女として、海で働き続ける。須崎地区の高齢者が働く理由は、身体的な優位性だけではなく、経済的な要因も大きいと考えられる。しかし、それだけではなく、生きがい感や社会的役割が高齢者を「海の仕事」へと向かわせる大きな原動力となっているのではないかという思いが本調査の直接的な動機である。

本研究の目的は、伊豆半島の半農半漁の村に住む海女や漁師が年齢に応じてどのように「海の仕事」（広義の意味での海と関わる仕事）の中身を変化させながら、生涯現役を貫いていくのか。あるいは、「引退」を考える「きっかけ」は何かを考察するものである。それはまた、漁村に住む高齢者の「海の仕事」を政治的、社会的、文化的文脈において考察し、高齢者の生きがいと経験知の再活用を検証することでもある。そして、当該社会で高齢者が果たす役割に対し、地域の人々からどのように価値付けられているのかを明らかにすることでもある。

近年、都市に暮らす高齢者の研究は、様々なレベルにおいて進められている。しかし、高齢者研究が社会保障をはじめとする福祉政策や医療・介護分野が多い中、高齢者の生きがい感や労働に注目することは、大きな意味があると思われる。高齢者というと、様々な問題が集積する都市の老人に研究の関心は集まりがちである。とりわけ、農業や漁業など、第一次産業を担い続けてきた高齢者の日常生活に目を向けた研究は少ない。そこで、高齢者が携わる仕事や生きがいについて、高齢者自身からの聞き取りを重ね、参与観察をするという人類学的なフィールドワークの手法を用いることで、高齢者の実態をより明らかにした。